

令和元年6月18日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04255

研究課題名（和文）母村と同郷コミュニティを結ぶ伝統行事の継承についての社会心理学研究

研究課題名（英文）A social psychological field research on the inheritance of the traditional events that connect the urban villagers' communities to the home village

研究代表者

石井 宏典 (Ishii, Hironori)

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：90272103

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、同郷コミュニティの老年期女性たちが参加する母村の伝統行事の継承過程に着目し、参与観察とインタビューによる実態把握をとおして、行事継承の意義について考察した。豊作豊漁を祈願するこれらの行事は、昔ながらの場所とやり方で執行することにより、参加者たちに過去の想起をうながし連続性の感覚をもたらしていた。老齢の女性祭司による拝みは、ムラにおける生者と死者との秩序をまもり、人びとの営みを自然の循環と調和させることを教えていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究をとおして、地域において伝統行事を継承することの意義のいくつかを明らかにすることができた。伝統行事は、地域コミュニティの住民とその出身者との交流を促す機会となりうる。伝統行事を、これまでと同じ場所でかつ変わらぬやり方で執行することをおして、現在と過去そして生者と死者（先祖）が結ばれ、参加者に連続性の感覚が育まれる。伝統行事は、人と自然の結びつきを再認識させ、自然の循環のなかに人間の営みを位置づけることを教える。これらの知見は、地域コミュニティの再生という今日的課題に取り組むさいにも重要な示唆を与えうる。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the inheritance process of the traditional home-village events in which the old-age women of the urban villagers' communities join, I consider the importance of the inheritance by doing participant observations and interviews. These events praying for good harvests and catches, through performing at same places and in old style, guide the participants to their old memories and give the sense of continuity. The prayers of old women priests teach the villagers to keep the right relationship between the living and the dead and harmonize their daily life with the cycle of nature.

研究分野：社会心理学

キーワード：同郷コミュニティ 伝統行事の継承 母村と都市 老年期 場所 連続性 自然の循環 沖縄

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究立案の経緯とこれまでの成果の発展

申請者はこれまで、沖縄本島北部に位置する特定集落の出身者たちが大阪や那覇などの都市に定着する過程において編成された同郷コミュニティを対象に、おもに職業的社会化過程の観点からフィールド研究を進めてきた。戦後の那覇においては、集落出身の女性たちが多く流れ込むことになった衣料品卸市場の形成過程に着目し、市場での参与観察とインタビューを重ねた(おもな成果に、石井宏典「ならいとずらしの連環」2008)。この調査の過程で、老年期を迎えた彼女たちが同郷性を軸にした多様な小集団を構成していることがみえてきた。そこで平成21~23年度には科研費・基盤研究(C)の助成を受け、同郷コミュニティの会合における参与観察を実施し、成員たちの相互行為の特徴を見出した。さらに、平成25~27年度には科研費・基盤研究(C)の助成を受け、同郷コミュニティと母村との交流実践に焦点をあてた研究に取り組んだ。そのなかで、1980年代半ばから同郷コミュニティの成員たちが担い手の減った伝統行事を営むうえで重要な役割を果たしていたことがわかった。青年期にムラを離れ移動先で老年期を迎えた彼女たちたちは、子ども時代のふるさとの面影と現在のムラの姿との落差に戸惑いながら、古い先祖の代から続く行事に参加していた。そこで本研究では、これら伝統行事の場に焦点をあてて調査を重ねることとし、行事継承の過程とその意義について考察することをねらいとした。あわせて他集落の動向との比較も視野に入れた。

(2) 本研究の学術的位置づけ

本研究はまず、地域・文化間の移動にさいして家族や親族、同郷人関係、エスニック・コミュニティなどが担う諸機能を考察した研究の流れに位置づけられる。移民家族をとりあげたC. E. Sluzkiの研究(1979)からは、家族が抱えることになる葛藤や対立を、過去や未来志向といった各成員の時間的展望に注目して考察するという視点を学びたい。日本の都市における同郷会を対象にした研究によれば、同郷会は当初、職や住居の確保のための相互扶助という道具的機能を中心に担ってきたが、移動先での生活の安定化とともに次第に表出的機能に重心を移し、出目的アイデンティティを確認するための場として位置づけられるようになった(石井宏典「職業的社会化過程における『故郷』の機能」1993他)。本研究でとりあげる同郷コミュニティについてもこうした機能的変遷を考察する視点を共有し、さらにライフサイクル全体への位置づけを重視することで、より多角的な考察を目指した。子ども時代を過ごした故郷空間に包まれることが老年者にもたらす連続性の感覚や心理的安定については、O.F. Bollnowの「被包感」(1963, 1965)やG.D. Rowlesの「身体的・社会的・自伝的内側性」(1983, 1990他)などの概念を参考にしながら、さらに考察を深める。また、伝統行事の継承をとおして地域の結びつきを回復させようとする各地の取り組みにも目配りしながら、研究を進める。

(3) 本研究の特色

移民や出稼ぎ者を対象にした社会学や文化人類学の研究は少なくないが、国家や大きな単位の地域(例えば、日本や沖縄)を対象にしたものが多く、集落や家族・親族関係などの小さな単位の移動民を長期にわたって追跡した研究はあまり見受けられない。本研究はこれまで特定集落の出身者を対象にした縦断的研究の成果を受けて立案されており、社会心理学が重視する形成論的視点から、ムラ在住者と出身者による母村の伝統行事の継承過程を考察する。そのさい、参与観察およびそれをふまえたインタビューにより、個々人の体験の「質」をこまやかにすくいあげるのも一連の研究に共通する特徴である(石井宏典「参与観察とインタビュー」2007参照)。これまでの研究同様に、背景となる社会変動を把握しつつ、ムラ人とその出身者の交流場面に寄り添うことでマイクロ・マクロ双方向からの社会心理学的接近を試みる。

本研究のもう一つの特徴は、地域間の移動と適応の過程を当事者のライフサイクルに位置づけ、過去や未来に向けての時間的展望と関連づけて理解しようとする点にある。移動先で老年期を迎えた者は、現在までの歩みをなんらかの連続性をもって結びつけようとする。こうした連続性を希求する心性が同郷コミュニティとして結晶化していることをこれまで研究によって明らかにしてきたが、今回はさらに、ムラ在住者と出身者が母村の伝統行事を共同で受け継ごうとする過程に密着する。

2. 研究の目的

本研究は、沖縄の特定地域から国内外への人びとの移動と定着の過程を対象にした一連の調査研究を受けて立案されたもので、老年期の都市移住者によって編成された同郷コミュニティ(同郷会などの同郷人どうしの結びつき)と母村側との交流活動を取りあげる。なかでも、同郷コミュニティの成員たちの参加によって継承が可能となっている母村の伝統行事に着目する。参与観察とインタビューによる実態把握をとおして、現在まで連綿と受け継がれてきた行事を未来につなげようとする諸実践が個人やコミュニティレベルに及ぼす影響について考察する。さらに本研究を通じて、地域コミュニティの再生という今日的課題に取り組むさいに、伝統行事を媒介とした在住者と出身者の交流という観点が重要なことを示す。

具体的には、多くのムラ出身女性が加勢することで成り立っている旧暦七月のシング行事をはじめ、できる限り多くの年中行事(年中祭祀)に密着し、準備から当日までの参与観察を3年

間にわたり実施する。フィールドは、沖縄本島北部に位置する本部町の備瀬集落とその出身者が中南部都市圏において編成する同郷コミュニティである。既存の郷友会（同郷会）だけでなく、老年者によって新たに編まれたコミュニティの諸活動にも目を向ける。母村の伝統行事の場を考察するにあたっては、その中心的担い手である老年期の人たちが、青壮年期とは異なり、過去と現在とを結ぶような時間的展望に引き寄せられる点に注意を向ける。子ども時代とは大きく様変わりしたふるさとにおいて、現在まで連綿と継承されてきた行事に身をおくことは参加者たちにある種の連続性の感覚をもたらしていることが予想される。参与観察とインタビューの成果を丁寧に考察する作業をととして、母村帰郷志向を抱えた老年者たちが母村とのかわりを再び深めることの意味をさらに明らかにする。

3. 研究の方法

同郷コミュニティの会員たちの参加によって支えられている母村の伝統行事（年中祭祀）の場および同郷コミュニティの集いの場に注目し、3年間で計30回の現地調査を実施した。研究方法の中軸は、行事や会合への参与観察と参加者たちへのインタビューである。以下にその概要を示す。

(1) 母村の伝統行事調査

本部町備瀬集落を対象にしてのべ20回の現地調査を実施し、神人（かみんちゅ、女性祭司）が取り仕切る年中祭祀の場での参与観察を実施した。とくに、旧暦7月に一週間にわたるシニグ行事、旧暦4月と6月に芋（甘藷）の神酒をつくって供える大御願（うぶうがん）、旧暦5月の共同井戸の拝み、という3つの祭祀に着目した。また、行事の変遷について神人やムラの年配者たちに聞きとりをおこない、急激に変化した生活環境のなかでこれらの行事が継続されてきた背景を探った。以下、とりあげた行事の現況を紹介する。

シニグ

シニグは、作物の収穫を終えてつぎの新しい農作に移る前という節目の旧暦7月に行われてきた行事で、その山場はムラの女たちによる神前舞踊である。この行事は、現在も備瀬を含め、本部町内13の集落において簡略化を含みながらも継承されている。備瀬では、7月20日にムラの豊作豊漁と航海安全を祈願し、22日にムラ内を巡って袂いの儀礼をおこない、23日と24日は男児と女児の健やかな成長を祈願し、25日に女たちがお宮（神）の前で輪をつくってウシデーク（小太鼓）を叩きながら踊る。26日に行事の無事終了を神に報告し、一週間にわたって行事を取り仕切った神人たちを慰労する。神前舞踊は、旧家や神アサギ（お宮）前の広場など4つの場所で、女たちが二重の輪をつくり、ゆったりとした曲調の歌に合わせて、反時計回りに巡りながら踊る。近年、この踊りに参加するムラ人たちが減るなかで、中南部や名護といった都市部に住むムラ出身者が多く参加する。2009年より毎年、参与観察を継続している。

大御願

神人たちが主導するムラの年中祭祀はかつて、主要作物の稔りに対応していた。自給的生活を送るムラの人びとにとって、これらの作物の稔りによって命が支えられていることから豊穡への願いは切実だった。旧暦4月と6月それぞれの吉日を選んで行われる2回の大御願では、いくつかの拝所に芋の神酒が供えられてきた。この時季は芋の苗を植え付けるのに最も適した時季にもあたり、芋を中心とした豊作豊漁および海の安全を祈願する。かつての主要作物のうち、ムラの畑で今も目にできるのは芋に限られ、それも自給用というよりも、限られた農家が換金作物として栽培するものになっている。この行事には、神人と手伝い役以外のムラ人の参加があり、とくに中高年の男性が目立つ。また、中南部在住のムラ出身者の参加も少数ながら認められる。3年間で計7回の大御願に参加した。

井戸の拝み

近くに川のない備瀬ではかつて、生活に必要な水はいくつかの共同井戸と天水に頼ってきた。井戸は「ハー」または「カー」と呼ばれ、ムラの井戸と水に感謝する「ハー拝み（カー拝み）」と呼ばれる祭祀が旧暦5月5日に神人たちを中心にしておこなわれてきた。ムラの各家に上水道が引かれた1966年からすでに半世紀ほどの時間が流れており、現在、水を汲むために井戸に通う人はいない。しかし、こうした環境の変化にもかかわらず、神人たちは代々の命をつないできた井戸を拝む行事を続けている。このハー拝みに加え、旧暦元旦に井戸の若水を供えて拝む元旦ウグシーと呼ばれる神行事にも参加した。また、ミジナリーとアラパシワタイ（新橋渡り）と呼ばれる葬送儀礼（ともに2016年）に立ち会うことができた。

(2) 同郷コミュニティの会合調査

中南部都市圏において老年期の同郷女性たちによって編成されている2つの同郷コミュニティを対象に、それらの月例会合の場での参与観察を継続した（2011年から継続して実施）。両者とも、かつて経済的相互扶助の仕組みだった模合を親睦・交流の機会として活用している。これまでの成果をふまえ、それぞれの場において展開する語りあいの内容や相互行為の特質を見極める作業を進めた。3年間で、福女会には5回、ホタル会には6回、あわせて11回の会合に参加した。2つの会についての概略を以下に示す。

福女会

1980年に当時60代的那覇在住の備瀬出身女性によって結成された。福女会の「福」は郷里

のシンボルであるフクギ並木からとった。当初は、戦後復興とともに形成された衣料品市場で働いてきた人たちが中心メンバーであり、仕事を終えた夜に特定の会員宅に集っていた。その後、メンバーの高齢化にともなって入れ替わりを繰り返し、現在は70~80代の20名余りで構成されている。毎月20日に那覇の中心市街地にある古いホテルのレストランに集い、飲食を共にしながら互いの近況を伝え合い、子どものころの思い出話で盛り上がる。これまで伝統行事シニグへの参加をとおして母村との交流を重ねてきたが、近年は会員の高齢化によって踊れる人は限られるようになった。

ホテル会

1937年生まれの備瀬出身女性同級生どうしという特徴があり、小学2年生のときに沖縄戦に遭遇している。会員のうち高校に進学したのは1人のみで、他は中学校卒業後に中南部および大阪で就職した。1990年代、子育てが一区切りした50代半ばに集うようになり、これまで月に一度の模合や年一度の旅行を楽しんできた。現在は、70代後半となった19名で構成。毎月第二土曜日に、宜野湾市の国道58号沿いの和風レストランで昼食をとりながらの歓談を楽しむ。日常的にも互いにこまめに連絡を取り合っている人が多い。2000年代に入ってから、シニグ行事が踊り手不足ということもあって会員がまとまって参加している。

4. 研究成果

(1) 伝統行事に参加することがもたらす連続性の感覚

旧暦4月と6月の年に二度、豊作・豊漁および海の安全を祈願する大御願をとりあげ、前日から始まる芋神酒づくりや当日の祭祀過程を記述し考察した成果を「自然との交わりの記憶 裸足と芋の世代が継承するムラの祭祀」としてまとめた。このなかでは、社会心理学の立場から行事が促す人と人との交わりに着目しつつ、人と自然の交わりにも目を向けた。

大御願では、神々や先祖とつながる聖なる場所で芋の神酒や重箱を供えての拝みが重ねられる。その場所を順番にあげれば、ムラ中心部の神アサギ(お宮)、ムラ草分けの旧家であるニーヤー(根屋)、海を望むナカリユグ(中竜宮)、ミーウガン(干潮時に渡ることのできる離れ小島である聖域)そしてクビール(ミーウガンを望む広場)となる。現在この行事に参加するのはおもに、芋を主食として育った中高年層の人たちである。かれらが生まれ育ったころのムラは水道・電気・ガスなどの現在当たり前の基盤設備は整備されておらず、子どもたちは、共同井戸への水汲み、芋掘りなどの畑仕事、豚やヤギなどの家畜の世話、遠い山への薪取り、海の浅瀬での貝や小魚の採集など、自然を相手にした労働に従事することによって家を支える担い手であった。行事の準備から執行の過程において、昔ながらのやり方で神酒をつくり、昔と変わらない場所にその神酒を供えて拝み、参加者どうしで共食し語らうなかで、過去と現在との重ね合わせが幾重にも生じていた。先達たちの振る舞いを想い出しながら、過去の出来事と現在の自分たちが結ばれ、著しい環境の変化はあるが、先祖の代からこのムラで生きてきたという連続性の感覚が醸成されていた。それは、自分とムラとが重なる連続性の感覚といえる。また、昔ながらのやり方を守る神人の姿勢は、農耕・採集、加工、調理といった自然から食に至る過程をなぞることで、自然の恵みの有り難さと、「難儀の過程」を経るからこそ訪れる喜びを共に味わいあうことの大切さを伝えていた。

(2) 伝統行事が教える自然との調和

かつてムラ人たちの命をつなぐ水を汲んできた井戸への感謝の拝みと、その水を用いた誕生と死をめぐる諸儀礼についてとりあげ考察した成果を「再生の井戸 沖縄一集落における生者と死者との関係」としてまとめた。ここでは、現在ムラで生きている者どうしの交わりだけでなく、生者と死者との関係にも目を凝らした。

旧暦元旦にシリガーと名付けられた井戸から汲んだ若水を供えての拝み、そして5月5日にムラ内の主要な井戸を巡る祭祀に参加し、ムラ人たちの水場の記憶について聞きとりを重ねた。かつて子どもが生まれるとムラの産井であるシリガーの水を焚いた産湯で赤子を洗った。また、元旦に神人たちはこの井戸の若水をお宮に供えて拝み、額にウビナディ(お水撫で)をするという習慣を今も続ける。一方、告別式に参列した故人の身内たちは浜辺の湧水であるパマガーの水を浴びて身を清める。かつてこの井戸は墓の群れに囲まれていた。そしてムラ人たちは、その水が山から流れてきたことを認識していた。昔の人は昇る太陽や湧き出す水に神の存在を感じ、誕生には日が昇る東(アガリ)にあるシリガー、葬送には日が沈む西(イリ)にあるパマガーの水を浴びて生命の更新と再生を願った。こうして、天が降らせた雨を集めた山々から地下に潜って流れ出した湧水は、飲み水や洗い水として用いられただけでなく、生命の再生をうながす聖なる水として扱われてきた。しかし、水道が敷設され、自給的暮らしから賃労働を中心とした消費生活へと移行するなかで、人びとは自然の循環から離れ、井戸への関心を失ってしまった。さらに急激な観光地化のなかにあっても神人たちは、祭祀のたびに神々を感じる場所で拝みつけ、カミ(自然)と死者と生者の秩序と調和を懸命にまもろうとしている。そこには、自然の循環と再生のなかに人間を位置づけようとする姿勢があった。

(3) 老年期女性が集う同郷会の意義

中南部都市圏に住むムラ出身者たちによって結ばれた2つの同郷コミュニティに密着し、集

いの場における語りあいに着目した参与観察をおこない、その成果を「語りあいのなかの 故郷 都市の同郷会に集う老年期女性たち」としてまとめた。

福女会とホテル会双方とも月一度の会合に年に数回の頻度で参加し、2010年からの9年間にそれぞれ18回と14回の観察を重ねてきた。記録された語りあいは時間的展望の観点から、「現在とこれから」にかかわることと「過去」の出来事についての振り返りに大別できた。前者は、互いの近況や郷里とのつながりを伝えあい、老いという喪失の過程を互いに支えあうような語りあいを特徴としていた。後者は、子どものころの故郷を懐かしむような語りあいが目立ち、身近な人やなじみの場所に包まれたかつての温もりを伝えていた。他方、その温もりが現在のムラでは失われてしまったことが嘆かれていた。彼女たちは、子ども時代の思い出を語りあうことをとおして、かつて自分たちを包んでくれていた故郷をその場によみがえらせようとしていた。このような故郷回帰の心性は、老いの道程を歩んでいることと深く結びついていることが推察される。彼女たちは月に一度、自らの芯が形成された故郷への思慕を寄せあい、語りあえる同郷の仲間がいることの有り難さをかみしめている。そして、同郷コミュニティに集い語り合うという営みは、身分たちの根を確認しあう作業である。

(4) 他集落における伝統行事（年中祭祀）の執行状況にかんする予備調査

備瀬集落におけるこれまでの調査結果をふまえ、本部町内の他集落における動向と比較するための作業に着手した。本部町は、18世紀初頭以降の本部間切時代に起源をもつ集落（区や字と呼ぶ）が15あり、これらすべてを対象にして、年中祭祀の現状を把握するために神人や区長・書記などを対象にした聞き取りを実施した。その結果から、以下の4タイプに分類できた。・ 神人が祭祀を主導、・ 神人不在のために区長や書記が代行、・ 住民が輪番で執行、・ 祭祀中断。調査前には、神人が不在となると年中祭祀の衰退が加速することを予想していたが、型以外でも一部省略・簡略化を含みながら、祭祀を継続する集落がほとんどであった。この成果をふまえ、「地域の共同性を育む伝統行事の継承実践についての社会心理学研究」というテーマを立案し、科研費への課題申請をおこなった（採択）。

表 祭祀執行状況による分類

・ 神人主導型	： 備瀬、伊豆味、辺名地、渡久地、瀬底、崎本部、謝花
・ 区長・書記代行型	： 浜元、具志堅、伊野波、並里
・ 住民輪番執行型	： 浦崎、健堅、石嘉波
・ 祭祀中断型	： 嘉津宇

は年中祭祀の数を減らした集落。は集落単位の郷土誌づくりに取り組む集落。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

石井宏典、「語りあいのなかの 故郷 都市の同郷会に集う老年期女性たち」、茨城大学人文社会科学部紀要『人文コミュニケーション学論集』4号、2019、1-26、査読無

<http://hdl.handle.net/10109/13896>

石井宏典、「再生の井戸 沖縄一集落における生者と死者との関係」、茨城大学人文社会科学部紀要『人文コミュニケーション学論集』2号、2018、1-30、査読無

<http://hdl.handle.net/10109/13516>

石井宏典、「自然との交わりの記憶 裸足と芋の世代が継承するムラの祭祀」、茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学論集』22号、2017、1-32、査読無

<http://hdl.handle.net/10109/13120>

〔学会発表〕(計 2件)

石井宏典、「再生の井戸 根の場所をまもる神人たち」、日本質的心理学会第15回大会(名城大学：沖縄県名護市)大会企画シンポジウム「場所の力とスピリット」、2018

石井宏典、「大人たちの世界にいざなう小さな道具」、日本質的心理学会第15回大会(名城大学：沖縄県名護市)会員企画シンポジウム「農と子どもと心理学」、2018

6. 研究組織

(1) 研究分担者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。